Mon Nara

Numéro252　Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会　Sep－Oct 2012　９～１０月合併号

フランス留学希望者に朗報！

仏国政府留学局 日本支局 関西オフィス開局（Antenne du Kansai）

このたび、フランス政府留学局は、フランスの高等教育を推進する公的機関として日本支局を創り、さらにフランスへの留学数が２番目に多い関西で、より身近なサービスが出来ればと、京都に新たなオフィスを開局することになった。オフィスはアンスティチュ・フランセ関西（旧関西日仏学館）の中にあり、留学のための情報提供、アドヴァイス、海外留学フェア等推進事業への参加、CEF オンラインシステムの窓口（2013 年９月開始予定）等を考えている。（※京都市左京区吉田泉殿町８、建物写真は↓）

去る９月１日から東京日仏学院、横浜日仏学院、関西日仏学館、九州日仏学館がフランス大使館文化部と統合しアンスティチュ・フランセ日本となり、世界全体での組織再編が行われ（モンナラ 2012 年 5,6 月号）今回はそれに続く前向きの一連の展開と考えられる。

（坂本会長 記）

Les Mariés de la tour Eiffel

コクトー最初の演劇作品は『エッフェル塔の花嫁花婿 Les Mariés de la tour Eiffel』と題されていて・・

さて上の絵の作者は？

⇒2 ページ「名句の花束」

イベント＆催事の記事案内

▽ 10 月 21 日　当協会主催　「秋の教養講座」　⇒ Page 5
講演テーマ：　住まいの省エネとエコロジー
講師：濱 惠介　エコ住宅研究家　（奈良日仏協会副会長、事務局長）
講演の後、昼食とシャンソン鑑賞（翔ユリ子さん）
▽ 11／11　奈良日仏シネクラブ例会⇒ Page 5
▽ 11／16　美術鑑賞会　特別展「絹谷幸二・豊穣なる～」⇒ Page 7
▽ 11／22　第１０９回フランス・アラカルト⇒ Page 7

名句の花束 （23） 〈フランス文学の庭から〉

三野博司（副会長，奈良女子大学教授）

Mon oreille est un coquillage / Qui aime le bruit de la mer.
私の耳は貝のから / 海の響をなつかしむ
（コクトー「カンヌ」1920）

前々回，アポリネールの詩にうたわれたエッフェル塔について，建設当時の作家・芸術家に嫌われたこの新しい建造物も，20 世紀に入って，新精神を標榜する芸術家たちによって歓迎されるようになったと述べました。今回紹介するジャン・コクトー Jean Cocteau (1889-1963) もそのひとりです。彼の絵にもエッフェル塔を軽妙なタッチで描いたものがあります。また，コクトー最初の演劇作品は，『エッフェル塔の花嫁花婿 Les Mariés de la tour Eiffel』と題されていて，1921 年パリのシャンゼリゼ劇場でスウェーデン舞踊団によって上演された音楽劇です。パリの俯瞰景を背景にして，舞台がエッフェル塔の 2 段目の展望台と言う設定で，そこでファンタジックな結婚式が繰り広げられます。音楽はミヨー，プーランク，オネゲルなど「六人組」のメンバーが担当しています。YouTube でも，原題で検索すれば，いくつかの演奏を映像付きで見ることができます。

同じ原題 « Les Mariés de la tour Eiffel » をもつシャガールの絵があります。1938 年の作で，切手の図柄にもなっている人気作ですが，こちらは訳語が一定せず『エッフェル塔と新婚夫婦（新郎新婦）（恋人たち）』などと訳されているようです。

コクトーとエッフェル塔との縁は深く，塔が建設されたのと同じ年，1889 年，彼はパリ郊外の高級住宅地メゾン・ラフィットに生まれました。今日でもしゃれたレストランがある町です。74 年の生涯を通じて，彼は，詩，小説，演劇，映画，絵画 の分野で，軽業師といわれるような軽妙で多彩な活動を展開しましたが，本質的に自分は詩人であると定義していました。

1919 年，コクトーは第一詩集『喜望峰』を発表し視覚の冒険に挑んだあと，その翌年，1920 年に短詩をあつめて『ポエジー』と題して刊行しました。感覚的レトリックを駆使して，旅や海辺の詩が多く含まれています。「カンヌ」もそのひとつで，六篇の短詩から成りますが，名句としてとりあげたのは，わずか 2 行の第 5 詩です。

Mon oreille est un coquillage／Qui aime le bruit de la mer.
私の耳は貝のから／海の響をなつかしむ

かつてとある仕事で月ごとに東京へ通い，夕方からは暇があればＮＨＫホールのコンサートを聴きに行くという生活を送っていたころ，ホールのロビーにはこのコクトーの句が刻まれた波模様と巻貝を描いた大きなパネルが掲げられていました。海の響きを聴き取ろうとする巻き貝のような耳が音楽に聴き入る耳を連想させるために，この句が選ばれたのでしょうか。

コクトーの詩集『ポエジー』は，彼の伝記などでもほとんど扱われることのないマイナーな作品です。またフランスの引用句辞典 Dictionnaire des citations をひもといても，コクトーのこの詩句は掲載されていません。つまり，日本だけで知られている句のようですが，有名になったのは，堀口大學の訳詩集『月下の一群』で紹介されてからです。

1925 年 9 月，それまで 10 年間にわたって作られた訳詩のなかから 66 人の詩人，340 篇の詩を選んで編まれたのが『月下の一群』です。「ジャン・コクトオ」と堀口大學は表記していますが，コクトーからは 10 篇が選ばれ，「耳」という表題でこの 2 行詩が掲載されています。しかし，この題は原文にはありません。原詩は「カンヌ」という詩で，1 から 6 までの数字が付された短詩からなり，5 のところに題名もなくわずか 2 行のこの詩が掲げられています。aime を「なつかしむ」と訳すことで，時間のへだたりが表現され，貝殻が夏の思い出となって余韻を残します。なお，耳と貝の結びつきは，コクトーの他の詩にも見られるものです。

おなじく『月下の一群』の大學訳で親しまれるようになったコクトーの「シャボン玉」をあげておきましょう。これも短いです。

シャボン玉のなかへは／庭は這入れません／まはりをくるくる廻つてゐます
Dans la bulle de savon / le jardin n'entre pas. / Il glisse autour.

「地に露華あり」

Sur la terre, les gouttes de rosée brillent

長谷川明子

講座「ジャメ先生と『猫』を読む」も 4 回目、二人の先生方の息も合って、格調高い講座の魅力はますます高まっている。今回は「写生する」というテーマのもと、写生について触れられている箇所を読む。

『猫』の主人は趣味人で何にでも手を出したがるが、ある日絵を描き始める。そこへ訪ねてきた友人が「画らしい画をかこうと思うならまず写生をしたら」と言う。イタリーの大家アンドレア・デル・サルトがそのように言っているというのである。主人はこの話を真に受けて写生をやり始めるが、実は人の悪いこの友人にからかわれていたのである。あとでこの友人が、でまかせを言ったことを明かす場面があるので、私は、いかにもイタリー人画家らしい名前につられて、この画家自身も架空の人物であると思い込んでいたのだが、16 世紀初頭に活躍した実在の画家であったことを、解説で知ることとなった。

さらに、「漱石は少年時代から美術が好きで、自身が絵を描くばかりでなく作品の本質的な部分に美術が関係しているように思われる」ということで、『三四郎』その他に絵画に関する会話が多くとりあげられていることも知った。そこで、何気なく読み飛ばしていた『坊ちゃん』の一場面が浮かんだ。赤シャツに誘われて釣りに出かけた坊ちゃんは、海原の向こうの島に生えている松をめぐる赤シャツと野だいこの会話に軽蔑を禁じえない。赤シャツ「あの松を見たまえ、幹が真っ直ぐで、上が傘の様に開いてターナーの絵にありそうだね」野だいこ「全くターナーですね。どうもあの曲がり具合ったらありませんね」「…あの島をターナー島と名づけようじゃありませんか…あの岩の上に、どうです、ラファエルのマドンナを置いちゃ、いい絵ができますぜ」といったやり取りである。いきなりここにターナーが登場したのは、さすが絵画に造詣の深い漱石先生だったからなのか、と納得。

ターナー「チャイルド・ハロルドの巡礼 :イタリア」

ジャメ先生は毎回、ご自身が翻訳された『猫』を一語一句丁寧に解説してくださるので、長年フランス語初級者のままの私にも決して難解すぎるとは思えないで、楽しく参加させていただいている。意味上からも語法上からも完璧な翻訳をされているに違いないジャメ先生だが、時には受講生の意見も聞いて、ネイティヴ・チェックされることもある。私たちは改めて、日本人であるから日本語や日本文化に詳しいかというと、決してそうではないことを反省させられる。俳句に由来する写生文が漱石の出発点にあるということだが、今回印象に残った箇所を断片的に紹介してみよう。

天に星辰あり	Dans les cieux, il y a les astres.
地に露華あり	Sur la terre, les gouttes de rosée brillent.
	(les fleurs sont belles comme les gouttes de rosée.)
飛ぶに禽あり	Les oiseaux volent,
走るに獣あり	les animaux bondissent,
池に金魚あり	les poissons rouges nagent dans les pièces d'eau,
枯木に寒鴉あり	les corbeaux hivernaux sont perchés sur les arbres morts.
自然はこれ一幅の大活画なり	La nature se métamorphose en une vaste peinture animée qui se déroule devant nous.

この中の「露華あり」について先生は、二つの仏訳を提示して受講生の意見を聞かれ、そのうちの一方を選択された。次回の講座のテーマは「会話」である。開講日を楽しみに待とう。
（※10 月 13 日(土)に予定されていた第 5 回講座は 10 月 20 日(土)11:00～に変更になりました）

≪悲しみの Sarrebourg≫ ［サールブール］

小寺 順子

もう１７年も前のことになります。エジプトへ旅行したとき、飛行機の中で一組のフランス人カップルと知り合いになりました。彼の名は Fernand Henry。奥様の名は Odette。彼らは結婚 40 週年記念に御嬢さんが旅行をプレゼントしてくれたとかで、エジプトへ来ていたのでした。Fernand は切手を集めるのが趣味で、日本の切手を送って欲しいと頼まれ、それ以来彼らと文通が始まりました。私は日本の記念切手やいろいろな国を旅行した時にその国の切手を買って送ったら彼は非常に喜んでくれました。

Fernand は手紙を書くのが好きで、私を困らせる手書きの長いフランス語の手紙をいつも送ってくれ、私は苦労しながらそれを読みました。彼らは Sarrebourg というドイツに近い所に住んでいて、いつも私に遊びに来るように言ってくれていました。しかし私にとって Sarrebourg というのは聞いたこともない街で、Strasbourg の近く程度のことしかわかりませんでしたので、遊びに行くすべもありませんでした。（ストラスブールの西 66ｋｍ）

ある日、フランスアラカルトのゲストにもなってくれた Yann Luk Klein が、Sarrebourg なら僕の住んでいる Metz から簡単に電車で行けるよと教えてくれ、私はそれではと Sarrebourg に行く決心をしたのでした。そのころ Fernand は老齢のせいで入退院を繰り返していたのですが、家はものすごく庭が広く、元気な時には今日は庭でエスカルゴを取って料理したというような手紙を送ってくれていました。私が Sarrebourg へ遊びに行くと言うと大変喜んでくれ、何日でも泊まっていいと言ってくれました。でも私はいろいろ旅程があったので一日だけ泊めてもらうことにしてフランスに行く計画を立てました。しかし出発の１週間前 Fernand は再び入院したと連絡があり、私は病院へお見舞いに行こうと思っていました。

フランスではまず Metz に行って、Yann のお父様の Serge の家に泊めてもらいました。そして Sarrebourg へお見舞いに行くんだけれど何を持って行けばいいだろかなどと相談しました。フランスでは入院している人に花を持って行くと花粉が妨げになるらしいのです。Serge はとても親切で、Sarrebourg は Metz から車で４５分ぐらいなのでナビで Fernand の家まで送ってあげると言ってくれたので、お言葉に甘え、送ってもらいました。そして Fernand の家に着いたら、奥様の Odette が出てきてくれました。

ところが彼女は「Fernand は一週間前に亡くなりました。」と言ったのです。私たちはもう唖然としました。どうして言ってくれなかったのかと聞くと、もし亡くなったことを言ったら Junko が来なくなるからと。Fernand は私が Sarrebourg に行くのをすごく喜んでくれ、私が行くことを決めてから村中の人に Junko が来る、Junko が来ると言って回っていたらしいのです。私はそれを聞いて、そんなに私が来るのを待っていてくれたのなら、どうしてもう少し早く来なかったんだろうと涙が出ました。１週間遅かったのです。私は Odette と一緒に Fernand の墓に行き、花を供え，Odette と二人で長い間泣きました。滞在中に Fernand のお墓に３回行きました。Odette は大変私を歓迎してくれ、娘さん夫婦を呼んでご馳走を作ってくれました。

それ以来 Sarrebourg は私にとって悲しみの街となりました。できれば来年もう一度 Sarrebourg へ行って，Fernand のお墓参りをしようかと考えています。フランスと日本は遠い国です。でもどんな国の人にとっても悲しみは皆同じ。心は繋がっているのです。（サールブールはモーゼル県にあって人口は約２．８万人）

✿✿✿ ✿✿✿ ✿✿✿ ✿✿✿ ✿✿✿ ✿✿✿ ✿✿✿ ✿✿✿ ✿✿✿ ✿✿✿ ✿✿✿

パリ、オルレアン、サン・マロの旅

亀岡　恵美子

◆バラ･薔薇･ばらの日々　今回は、フランスのバラ園巡り第一弾。私と妹夫婦との気の張らない３人旅だ。　パリでは、地下鉄とバスを乗り継いで、ブーローニュの森のバガテルへ。かつては貴族の猟場だった広大な森の一角にあるこのバラ園は１３世紀の館や樹齢何百年という大木を残し、手入れの行き届いた広い芝生に、色とりどりのバラがゆったりと配置され、爽やかで上品な印象のバラ園だ。ここから出て少し行くと、森の中に開かれた広い芝生では、咲き誇るバラをバックに、自慢の羽を広げて堂々と歩く孔雀がそこここに群れ、水鳥が遊ぶ池や、草花が揺れる小道など変化に富んだ風景が次々と現れる。庭園は無料で開放され、孫を連れたおばあちゃんや若い親子連れがのんびりと散策していた。

次は、以前テレビで見た「フランスの最も美しい村」（154 箇所）の一つ、バラの村、ジェルブロアへ。ルーアンの駅や郵便局で訪ねても誰もその村を知らず途方にくれたが、タクシーの運転手さんがナビで見つけ、１時間余り走ってようやく村に到着。村中が申し合わせて、木組みと荒壁が美しい家々の外壁をつるバラで飾っている。小雨に濡れた舗道にほとんど人影はなく、まるでお伽話の中に迷い込んだようだった。

列車でオルレアンに向かう。妹宅に二度ホームステイしたことのあるジェシカがママと一緒に駅で待っていてくれた。ジェシカの車で、フランス屈指のバラの育苗と販売を手がけるアンドレ・エブへ。広大なバラ園は手入れの行き届いたイギリス風庭園で、色とりどりのバラと草花が見事にマッチして、懐かしく優しい雰囲気が漂う。大勢の人が訪れていて、お目当ての苗を手押し車に満載した紳士が、３年後に自分の庭を見に来てくれと叫んだ。

フランスで最も大きいというオルレアンの森を横切ってジェシカの家に。途中ほとんどの家の庭にバラが咲いているのが見え、ジェシカの家の中庭にもバラが咲きこぼれていた。　バラ園巡りはまだまだ続くが、私がぜひお話したい場所が他にある。

◆13世紀の工法で城砦再現　オルレアンからジェシカが連れて行ってくれたゲドゥロンだ。考古学者、美術史研究家達が１３世紀そのままの城砦を全て当時の手法で建設しようという実験的な建設現場。土地の準備、行政上の手続きなどプロジェクトの学術委員会が全て行った。この委員会が石工、左官、樵など優秀な専門職人約３５人を雇い入れ、その指導の下で、臨時工として素人の情熱家、養成中の研修生、専門機関の若者などが無料で手伝う。使う道具も全て１３世紀当時のものを手作りで再現し、運搬は馬車、作業は人力、作業着は当時のスタイルという念の入れようだ。資金は、見学者の入場料でまかなわれている。私達が訪れた日も大型バスや車で大勢見学していた。専門家による説明を聞き、軽い作業の体験もできる。プロジェクトが始まって約１５年、城の塔や領主の住まい部分は形が出来つつあるが、建物完成後も、庭を造り、村を作り・・・と、まだまだ終わりそうにない。（会員）

奈良日仏協会主催　秋の教養講座

１０月２１日（日）　11 時～ 於：奈良ホテル（奈良市高畑町 1096）

◆講演テーマ：　住まいの省エネとエコロジー

濱 惠介　エコ住宅研究家（当協会副会長）

<<講演の趣旨>>

現代の便利で豊かな生活は、様々な資源とエネルギーの大量消費によって支えられています。その結果生まれる膨大な二酸化炭素（CO２）や廃棄物、さらには放射性物質などによって温暖化（気候変動）と土・水の汚染が進み、我々の暮らす環境は極めて危うい状況に陥っています。

このままでは希望の持てる未来を語ることは困難です。ほどほどの快適さや便利さを維持しつつ、環境への悪影響を最小限にするためには、今よりずっと少ないエネルギーと資源の消費で営なまれる社会に向かうしか道はありません。それも、再生不能の資源（エネルギー源）に頼るのではなく、尽きることない自然の恵みを生かしその範囲内で生きて行く方法を見出さなければならないのです。

環境問題は一人ひとりの行為の膨大な積み重ねの結果です。我々と未来世代が安心して暮らせる社会を実現するためには、各人の暮らし方と住まいづくりで何ができるのか、講師が実践する事例を紹介しながらお話しします。

なお、「エコロジー」とは元来「生態学」のことですが、近年は自然環境との調和＝環境共生の意味に用いられています。

<<秋の教養講座開催要目>>

講師：濱 惠介　エコ住宅研究家　（奈良日仏協会副会長、事務局長）

◆プログラム◆

11 時　講演「住まいの省エネとエコロジー」

12：30　昼食会（フランス料理）

13：30　シャンソンコンサート（翔ユリ子さん）14：30　終了

参加会費　5000 円[会員]　6000 円[非会員]

第29回 奈良日仏協会シネクラブ例会の案内

日時　11 月 11 日（日）　１３：３０～１７：００

(※会場の都合で 10 月 28 日から変更になりました)

会場　奈良市西部公民館（近鉄学園前駅南）５Ｆ　講座室

プログラム　『華麗なるアリバイ』(Le Grand Alibi, 2008 年, 93 分)

監督　パスカル・ボニツェール

参加費　当協会会員　無料　非会員　300 円

問い合せ　浅井直子　Nasai206@aol.com　tel. 0743－7403

誰もが経験する子供時代、大人になってそのいとおしさがいっそう身にしみるという面もあるようです。昨年9月から今年6月にかけての「子供」特集は、身近なテーマとあって、毎回はじめての方が遠方からわざわざ奈良まで足を運んでくださったり、とても熱心な意見交換が行われました。また例会には参加できなくとも、奈良日仏協会の複数の会員の方たちはじめとして、パリ在住の日本文化センター関係者の方、三重日仏協会の役員の方、神戸日仏文化講座のスタッフの方たち他、本当に多くの方々が励ましの言葉を寄せてくださったことに、とても力づけられました。ただ映画をみるだけではなく互いに語り合える場を、奈良日仏協会が提供できることを誇りに思うと同時に、1994 年の協会発足当初から、「シネクラブ」の立ちあげと

運営に尽力して来られた先人有志の足跡と助力に、あらためて感じ入るところが大きかった一年でもありました。

さてこの秋から来夏にかけては、新たな企画として「フレンチ・ミステリー」特集を組んでいきます。第1回目に取り上げるのはパスカル・ボニツェール監督の『華麗なるアリバイ』です。原作は名探偵ポワロが登場するアガサ・クリスティーの『ホロー荘殺人事件』ですが、映画にはポワロは登場しません。イギリスの「ミステリーの女王」の作品に、フランス人俊英監督はいかなる脚色と演出を施しているのでしょうか？フランス映画ならではの特徴が、通常のフランス映画よりも鮮明に感じたりするかもしれません。フランス映画を代表する俳優陣たちの顔ぶれは見事ですし、最後までサスペンスとドラマの行方を楽しめる作品に仕上がっています。

パスカル・ボニツェールは、監督としてよりもむしろ脚本家として、多くの仕事を手がけています。これまで当日仏協会の映画講座やシネクラブで取り上げたことのあるアンドレ・テシネやジャック・リヴェットの作品にも、彼の脚本によるものがありました。彼はすぐれた批評家そしてフランス国立映像音響芸術学院教授でもあり、仏映画界を支えるきわめて重要な人物です。そんなパスカル・ボニツェールの存在を知ってもらいたいというのも、今回の作品を選んだ一つの理由です。

尚、11月24日(土)と25日(日)には、第9回奈良名作映画祭が奈良県文化会館国際ホールにて開催されます。当シネクラブはこの映画祭の広報に協力しています。「モンナラ」同封のチラシに記載のプログラムと日程をご覧になって(フランス映画『君を想って海をゆく』[2010]の上映あり)ぜひ映画祭にお出かけ下さい。チケットに関しては上記問合せ先まで連絡お願い致します。

スーパーマーケット

supermarché　　高 橋 潤 子

▼フランスでも、日々の暮らしの強い味方といえばスーパーマーケットである。パリには朝市(マルシェ)のイメージがあり、マルシェで買い物をする人ももちろん多い。マルシェで買えるものは、肉や魚、野菜などの生鮮食材から衣類、鍋や化粧品、古書や日用品まで多岐にわたる。ただしマルシェで買い出しをするには時間と忍耐が必要だ。それぞれの屋台で列を作って順番が来るのを待つことになるし、ひいきの店が決まっていない場合は、値段や新鮮さを比べるために、何度もマルシェの端から端まで行き来することになるから体力も使う。お昼近くになると、半端に余った肉や魚を特売価格で売ってくれたりするので、「どこの店の切り身がもうすぐたたき売りになりそうだ、・・・なら買おうかな？」などとアンテナを張り巡らしたりする。だから私にとってマルシェは意外に頭と体を使う場所なのである。

▼その点スーパーはもっと手軽で簡単だ。行きつけのスーパーなら、どこに何があるか覚えているから動きに無駄がなく、混んでいなければ30分もかからず買い物を済ませることができる。また、マルシェではまず手に入らないトイレットペーパーや文具などもあるため、他店にいかなくても済むという便利さがある。フランスのスーパーの朝は早く、大体8時半から9時には開店している。日本だと10時開店のところが多いので、洗濯や掃除をしてから買い物をすることになり、怠惰な私などそれから出かけるのがおっくうになるのだが、8時半開店だと子供を学校に送ったその足で買い物を済ませてしまうことができる。かつては夕方比較的早く閉まっていたスーパーだが、今は20時半～21時の閉店が当たり前になってきた。

▼さて、一口にスーパーといっても、規模などは色々だ。日本でもよく知られているのはモノプリ(Monoprix)であろう。最近は自社ブランドのエコバッグがパリ土産に人気だと聞く。大型店としては、カルフール(Carrefour)、ルクレール(Leclerc)、オシャン(Auchan)などがある。パリの中心部にはないので旅行者にはなじみが薄いが、品ぞろえと規模が半端でないので、住民の買出しにはかかせない。ただし目移りして選択に迷ったり、店内が只広いので途中で疲れたりすることもある。パリ市内にはSuperette と呼ばれる小規模のスーパーがいくつもある。G20、Franprix、Simply、Carrefour Marketなどで、日常の買物はここでも十分間に合う。さらにハードディスカウントのDia、Lidl、Aldiなども頑張っている。他にも日本のコンビニに近い 8 à huit、Monopなどがあり、お値段はやや高めだが、営業時間が22時、23時ごろまでと非常に長く、調理済み食品も多いので、忙しいビジネスマンなどがよく利用している。

▼　私の家の周辺は、徒歩圏内にスーパーが9軒もあるという競合地帯だが一応ひいきの店は決まっている。生鮮品の回転が非常に早くて新鮮でなおかつ安い。ただし商品の種類は少ないので、紅茶やシリアル、スープなどを買うときは別の店に行く。

（次号に続く）

第 109 回　フランス・アラカルト

En plus ++++
★ボジョレー・ヌヴォー賞味★

「国際化について」avec Mme Elisabeth SANO（エリザベト佐野さん）

11 月の“フランス・アラカルト”はひさびさに奈良・生駒在住のフランス人、エリザベト佐野さんをお迎えします。スエーデンに赴任されていたご主人（生物学者）が退職されたので、日本におられる時間が多くなったようであらためて、いままで滞在された国々の想い出を語りながら、いまあらためて「国際化」について語って頂きます。いつものようにマダム直子の手作りのケーキと選りすぐりの紅茶の香り、さらにアラカルトではボジョレー・ヌヴォーの解禁を祝って、新酒を一緒に味わいたいと思います。

●日　時：１１月２２日[木] 15 時から
○会　費：会員 1,000 円、一般 1,500 円
（お菓子とドリンク付き）
●場　所：カフェ Mardi Mardi（マルディ×２ ）
○問合わせと申込み：奈良日仏協会事務局：　★[巻末に連絡先を記載]
●E-mail：afjn_info@kcn.jp　TEL&FAX: 0743-52-3939

※奈良市登美ヶ丘 3-12-9 登美ヶ丘ビル 1F（TEL　& FAX:0742-44-5701）学園前駅からバスで７分、西登美ヶ丘二丁目バス停前（駐車場あり）。
http://mardimardi.exblog.jp/11477753/

会場のスペースが限られていますので、申込みは先着 15 名様に限定します。
今月はお店から特別に≪生ハムと季節のフルーツ　ラフランスを使った前菜≫を用意してもらいます。
ワイン会につき、飲む方はお車で来られないよう…。

エリザベト佐野さん　プロフィール

パリ地方に生れる。ドイツのフライブルグ大学でドイツ語を学ぶ。同大学で生物学を専攻されていたご主人と出会う。その後ご主人がハーバード大学に赴任され、米国ボストンに移住。20 年前にご主人の転勤で来日、日本語をはじめて本格的に学ぶ。その後、ご主人はスウェーデンで単身赴任、エリザベトさんも日本とスウェーデンを行き来。退職後の現在は一家で生駒市に在住。趣味はクラシック・ギター、読書（エッセイ、思想）、ガーデニング。フランス、ドイツ、アメリカ、イギリス、スェーデン、韓国での生活や旅を経験を通して経済、旅行、思想、学問、料理等々、さまざまなレヴェルで国際化が進む現状について語って頂く。恒例により仲井氏のギターに合わせて仏語で詩を朗読されます。

◆ １０８回フランス・アラカルトからのレポート◆

９月のアラカルトはブルターニュのサンマロ[St.Malo]出身ロマン・ベオース[Béauce]さんを迎えました。ロマンさんは大学で映画学を専攻した後、プライヴェートスクールで物流（PD・logistique）を学ぶ。その後、オーストラリアで英語研修のため１年を過ごす。そこで関西出身の多くの日本人と出会ったことで日本に興味を持ち始める。その後、来日して２年間を大阪で過ごし、日本人女性と結婚。一旦、母国に帰るも再び大阪に。現在、ブルターニュと日本の間の文化交流のためにさまざまな活動をしています。（右写真はスタジオのベオース氏）

フランス・アラカルトで同氏は「ケルト文化が現在、国境を越えて一つになったコミュニティを持とうしていること（たとえばケルト圏内のサッカー選手権とか）。ケルトとは、民族的であると同時に、ケルトの音楽や自然に興味を持つことで外国人であってもケルトの一員に成れる」等々、、一見クールなロマンさんはプロジェクターを使って、熱く自分の文化的ルーツを語られました。　詳細は⇒ロマン氏のグループの Facebook を参照:www.facebook.com/groups/kansaibreizh/

美術鑑賞会のご案内（１１／１６）

「特別展　絹谷幸二　～豊穣なるイメージ～」

恒例となりました奈良日仏協会美術鑑賞会を以下の要領で開催します。 ご希望の方は、会員氏名・同伴者氏名を明記の上、当協会事務局まで FAX または E メールにてお申し込みください。
なお、参加費は不要です。当日は「関西文化の日」に当たり、17 時ごろから館内でミュージアムコンサートが開かれ、こちらもお楽しみいただける予定です。

内　容：“絹谷幸二　～豊穣なるイメージ～”　を南城監事のご案内で鑑賞
日　時：2012 年 11 月 16 日（金）、15：00 までに集合（入口ホール内で）
場　所：奈良県立美術館　　奈良市登大路町 10-6　　電話 0742-23-3968
定　員：20 名程度（先着順）申込先：奈良日仏協会事務局　Tel：0743-52-3939
★[巻末に Fax, E-mail 等記載]

◆2012 年度　第4回理事会報告 ◆

日　時:2012 年 9 月 24 日(月)13:00～15:00
場　所:グリーンホテル 馬酔木(奈良市東向北町 15)
出席者:坂本会長、濱副会長、浅井、中野、仲井、野島、樋口各理事
三木、森井 各理事、
他に、小寺さん(提案者)、中浦(モンナラ編集者)

1) フランス･アラカルトの運営形態に関し、小寺順子さんを招き諸々の意見を伺ったあと意見交換をおこなった。
6回のうち、1･2回を終末に別の形式で開催しては。
2) 前回の理事会以降の活動状況と予定:シネクラブ、フランスアラカルト、会員名簿の修正など。
3) モンナラ編集と発行の予定、新編集担当者の紹介。掲載記事の確認など。
4) 教養講座等の計画:秋の教養講座の実施方針の確認、美術鑑賞会計画等。
5) その他:次回理事会予定、講演会の企画プラン。

会員短信コーナー

Japan Expo Paris 今夏も好評裡に終わる

会員　岩崎洋子

この催事は漫画・アニメ・ゲーム・音楽などの大衆文化と書道・武道・茶道・折り紙などの伝統文化を含む日本の文化をテーマとして 2000 年からフランス・パリ郊外で開催されている、総合的な日本文化の博覧会です。主流は、日本アニメや漫画の紹介です。

流行は、何と言ってもアニメなどのキャラクターになりきっての「コスプレ」です。今年は、７月５日～８日までパリの北東郊外の Ville-pinte で開催されました。入場者数は約２１万人。欧州各地のＪ-エキスポで人気の「食」は日本風の Yakisoba だったとのこと。

仏の作家エリック・ファイ氏が奈良女子大で交流会

小説“Nagasaki”で 2010 年のアカデミーフランセーズ賞を受けた作家のエリック･ファイ(Eric　Faye)氏を招いて奈良女子大にて交流の集いが予定されています。11 月 11 日[日]午後（時間未定）奈良女子大学仏文研究室と NPO 法人京都・奈良ＥＵ協会との共催。詳しくはホームページとメールでお知らせします。

★TEL/FAX 0743-54-0052　　下記に E-mail 記載　（仲井）

編　集　後　記

▼このたび本誌の編集を担当することになりました中浦です。’０８年末まで本誌の編集に携わってまいりましたが地域自治会の業務のために当協会から遠ざかっておりました。再び協会に参画でき喜びも一入です。今後も楽しく魅力ある誌面作りに尽力して参りたいと存じております。▼ここ数年は仏語を離れて日本古典に埋没する日々を送って参りましたが、古文に親しむにつれその文法構造が仏語と似ていることを発見しました。一番よく知られているのは、「な」～「そ」(ne--pas)の否定表現でしょう。それ以外にも半過去や接続法などに似た構文もあります。機会があれば日本の古典と共に紹介してまいりたいと存じます。▼今後とも皆様のご支援をお願いいたします。

▲右上の写真は象の鼻に例えられるエトルタの白亜の洞門の一つで、古くはモーパッサンの「女の一生」の舞台として有名です。70m に及ぶ断崖は周辺数十キロにも延びて、魅惑的な港町であるルアーブル、オンフルール、ドーヴィルなどを抱いているのです。小生が 2004 年にルアーブル滞在中に念願だった上記小説のゆかりの地を訪れた時の写真です。　（ＴＮ）

協会会員を常時募集しております！

モンナラでは会員を募集しています。また、本誌への投稿を歓迎いたします。論文、エッセイ、旅行記、最近の出来事、会員の皆様の活動などジャンルは問いません。なお、文章は、誌面の都合で意味を変えずに表現の変更等をさせて頂く場合があります。予めご了承下さい。奇数月１５日が締切です。

Mon Nara　sep--oct　2012　9-10月合併号　Numéro252

奈良日仏協会　Association Franco-Japonaise de Nara
HP：　http://www.afjn.jp　E-mail : afjn_info@kcn.jp　TEL&FAX　0743-52-3939
〒630-8691 奈良中央郵便局 郵便私書箱第 30 号[郵便物のみ]　発行責任者：坂本成彦